

# 第二回リーダーズセミナー報告

開催期日 平成七年三月一八日(土)～一九日(日)  
開催場所 香川県青年センター

## リーダーズセミナーの感想

先日の三月一八日・一九日の二日間、香川県青年センターに於いてリーダーズセミナーが行なわれました。短期間でしたが、内容も濃く、充実した二日間でした。

今回は講師として松山商科大出身の大城戸先生と香川大出身の倉知先生をお招きしました。両先生の講演も非常にすばらしく、学生から質問等も出て先生と学生が一体となった講演会となりました。倉知先生は、部の在り方・運営等についてお話しをしてください、部活動は勝つための剣道ではなく部員全員のことを考えた剣道をやっていくことを教えられました。大城戸先生は、剣道を始めてから世界選手権で優勝するまでのことを話してくださいました。やはり強くなるためには人より多く練習しなければいけない、と痛感しました。また、自分の人生において剣道とは何なのか、何のために剣道をしているのかをあらためて考えさせられたことでした。二日目には大塚先生に「剣道の一本」について講演していただいた。実際に斬るための訓練として始まった剣道が竹刀の登場によりだんだんスポーツ化して行く過程で、一本の内容も変わっていったことを話してください、一本の定義の必要性を感じました。

初日の稽古会は山神先生の指導のもとに行なわれ

ました。準備運動方法について指導していただきましたが、今まで自分たちが行なっていた準備運動がいかにいい加減であったかが認識されました。

二日目の稽古会では大城戸先生に素振りの指導をしていただきました。竹刀の軌道、手首の使い方、肩の動かし方等、細かく指導されました。地稽古もみんな一生懸命やっており、充実した稽古会でした。学生討論会ではグループに分かれて各大学の問題点、幹部の在り方等を話し合いました。やはりどの大学も部員の減少が問題となって、少ないながらもがんばっているようです。色々な大学の意見が聞けてかなり有意義であったと思います。

しかし反省点もあります。例えば、参加校数が少なかったことです。加盟校四校のうち今回参加したのは一五校しかありませんでした。日程的に合宿等と重なったのかもしれない。しかし、リーダーズセミナーというのは中四国連盟全体を盛り上げようというねらいなので、全大学が参加しないとあまり意味のないものになってしまいます。今後この点を考えて、開催日程を決め、また、全大学がぜひ参加したいと思うようなセミナーを計画していきたいと考えています。

最後になりましたが、忙しい中お越しくくださった大城戸先生、倉知先生、今回ご協力くださいました大塚先生、山神先生、木原先生ありがとうございます。また、準備等をお願いしました香川大学のみなさんありがとうございました。

# 全員で合宿と練習を考え、やったあの頃

○香川大学 O.G  
倉知順子

こゆるち・高松市立紫雲中学校教諭  
くらち・高松市立紫雲中学校教諭  
5段・高松市立紫雲中学校教諭  
香川大学卒業生団体16位  
全日本女子学生団体8位  
全日本女子学生団体優勝  
中国女子学生団体優勝

は剣道やらないかん、と思った」とか、ろくな動機ではない人が多くいたのですが、まあ動機は何であれ剣道を続けることが大切だと思うのです。

## 一年で七回やった合宿

私は本当は中学の英語の先生なんです。なぜか剣道に関わり続けて現在に至っています。私の父が剣道をやったのが剣道との出会いです。また、同い年のいとこが剣道をやっている、その子が強いんですよ。あの子にできる事なら私にもできるはず、と思ったのがそもそも間違いの始まりでした。で、一回やりはじめたらやめさせてくれないという親でしたから、今まで続いてしまいました。

香川大学の大林さん、剣道を始めて何年位になりますか？(大林さん)「二〇年位です」  
そうですか。じゃあ近藤君は？(近藤君)「一四一五年です」  
ありがとうございます。では高校から始めた方？(二一人)「何故始めようと思いましたが、ただ面白そうだったから」

(他の人に)君は？「小学校の時、野球と剣道をしていたのですが、中学校では掛け持ちはだめで、剣道の方が大会が多かったので剣道を選びました」  
そうですか。昨日、自分の中学校の部員にも聞いてみたんですね。すると、「本当は柔道部をみにきたんやけど、手を引つ張られて剣道部に連れて行かれた」  
「剣道部にかっこいい先輩がいて、あ、これ

私が香川大学の一年生の時、私の同級生は入部当初、男子九名、女子三名でした。最終的には男子三名、女子三名になりました。最初は女子も「三人娘」と呼ばれていましたが、だんだん監督も「三人息子」と言うようになり、まともに女性として扱ってもらえなかったような気がします。男子キャプテンが高校から剣道を始めた子で、残りの二人は中学校ではしていたけれども高校ではしていませんでした。女子の方は、小学校から延々やってきて高校でキャプテンをしたのが三人、私以外の二人は個人でインターハイにも行ったという強者でした。しかし、六人共すごく仲が良くて、どこに行くのも一緒でした。

大学時代で一番印象に残っていることは、とにかく合宿が多い、ということ。香川大学の江崎キャプテン、香川大学剣道部部長の三番を歌って下さい。(江崎君)「♪新歓合宿、夏合宿、新二年合宿なんのその」  
はい、結構です。こんな部歌があります、とにかく合宿が多かったのです。岡山理科大学の方、年間合宿何回ありますか？「二回です」  
広島大学の方は？「二回です」意外に少ないですね。じゃあ、徳島文理大学の方？「二回です」  
私が入部した時は、年間七回合宿し

てまして、監督の山神先生は何を考えるとのかなあ、と思っていました。先生を目の前にして悪口を言うのもつらいのですが、(笑)四月の間は入部して間もないのでちやほやされて良かったのですが、五月の初めに新歓合宿が一週間あり、それが一回目、そして六月にインカレ合宿があります。これは普段の授業日です。それから夏合宿が徳山大学の所でありまして、女子は徳山大学の部員の所で寝泊まりし、男子は柔道場で寝泊まりしました。これも一週間近くありました。それが終わって、お盆に後期合宿というものが三、四日ありまして、そのあと秋までなく、平穩無事に過ぎます。そして幹部交代をして、寒稽古合宿。これが四、五日ありました。その後、追い出し合宿、これはそんなにきつい合宿ではないのですが、ただ一年生にはきびしいお酒の飲み方の教授があります。その翌朝、海へ行つて「泳げ！」と水泳指導です。一月の末にですよ。いまだに香大ではやっているのですが……。最後に新二年合宿、これが一週間あります。以上年間七回の合宿がありました。

また、毎朝のトレーニングが何よりもつらかったです。みなさん、さつき体育館で腕立て伏せやってみましたね。誰かが「その人の体力に比べてやりなさい。壁に手をつけてもいいよ」と言っていましたね、山神先生？あんなこと私たちの時はいつてくれませんでした。ね、山神先生？(山神先生)「時代が変わりました」(爆笑) そういうことになりました。

う。三〇回、二〇回、一〇回、これで一セット。結局三セットやり、腕が足のようにになりましたね。さつき、腰に悪いから足上げ腹筋はしないように、と誰かが言っていました、これを一分、五〇秒、四五秒の三回。ランニングも毎朝二キロ。その他諸々のメニューもあって、お昼はご飯が喉を通りませんでした。

合宿の話にもどりますが、みなさん合宿の日程とか場所、内容をどのように決めていきますか？誰が決めていますか？幹部と監督？  
そうですか。私たちが六人集まって朝から晩まで合宿の話をしました。四日間合宿をし、晩は武道館へ出稽古に行き、朝はかかり稽古を中心に行つていこう、という計画を立ててキャプテン一人が監督の所へ報告に行つたのです。ダメだ、と突つ返されたのですが、後から私たち全員で押しかけて、なんとかOKをもらったことがありました。合宿の計画を練る段階でとにかく幹部全員で話し合つて、この合宿ではこのような力をつけたい、ということをやりました。やっぱり合宿では上級生が楽をしたらいかん、と思います。  
合宿の計画で一番監督と意見が合わなかったのは夏合宿についてでした。私たちは地元でやりたい、地元でやって地元の先輩にたくさん来ていただきたい、そこでとにかく実力をつけたい、ということと計画を練つて監督の所へもって行つたのですが、監督の方は、どうして外へ出ないのだ、というわけ。まあ、結局外へ出るようになって、岡山で大体大と練習試合をし、その後天理大へ行きまし

た。たまたま、その年の全日本の大会で二回戦で天理と当たりました。胸を借りるつもりでやったのが良かったみたいで、なんと天理に勝ちました。その後、国士館と対戦したのですがさすがに国士館、全然歯が立ちませんでした。で、全日でまだ一勝もしていない私に、師範の植田一先生は「全日で一勝くらいしなければいけないよ」と言われました。その時は私は三年で、もう引退だったので、「来年もまたがんばります」と答えて四年まで続けるようになりました。試合に出してもらうためには練習に来る、というのが次の幹部との約束でした。そして四年にもなって練習に行っていた甲斐もあって、なんとか全日で勝って、やっぱり四年間やってよかったな、と思いました。中四国では幹部交代は早いと思いますが、皆さんぜひ四年生まで続けて下さい。

●第二回リーダーズセミナー講演

# 何のために剣道をやっているのか



おおきど・いさお  
7段教士  
新田高等学校・松山商科大学卒業  
全日本学生個人優勝  
中四国学生個人優勝  
世界選手権個人優勝

いざ職場へ出て、大学時代が何に役に立ったかというところ、何があっても動じない度胸がついたということ。本来、私はこういうことを人前で話すことがなによりも苦手なものです。本当に。人前に出ると声が出ない、という性格だったので、剣道をしていて色々な場面で人と会うことが多くなったということが自分にとってプラスになったと思います。

## 子どもの指導にあたって

今、小中学生の間では、だんだん剣道人口が減っています。中学校では練習試合やらなにやらで休みがつかれますし、保護者の負担も大きいものがあります。

私が指導している中学校も以前はとても強かったのですが、今は恥ずかしいことに一年生男子はゼロ。二年生男子は五人で、団体戦ギリギリの人数です。幸い女子は一、二年で

一七人もいます。そんな生徒に、なんで剣道やっているの、と聞くと、「とにかく友達といるのが楽しい」と言うのです。女子は初心者が一〇名いるのですが、だれもやめないので、とにかく友達といるのが楽しい。これも大事なことであります。確かに、たくさん練習し、高いレベルになることも大事なこともかもしれません。みなさんの中にも将来教員になる方とか、スポーツ少年団で指導する方とかいると思いますが、いかに楽しい部活にするか、ということも剣道人口を増やすのに大切なことかと思えます。未経験者にとって剣道は敬遠されがちなものだと思うのです。確かに手間がかかります。しかし私の中学では、女子のレギュラーのうち二人が初心者です。初心者は、変なくせがないから教えたら教えただけ上達するんですね。やはり初心者の子、また、補欠でがんばっている子を

大事にしていきたいと思えます。最近の子供たちは、色々な場面で我慢をするということもあまりないですし、友達と遊んだ経験のない子供がたくさんいます。だから、剣道を通じて友達ができたとか、友達とこんなことをしたんだよ、とか心に残るようなクラブ活動もこれから必要なのではないのでしょうか。

大学でも四年間補欠でがんばる人もいます。しょう。やっぱり、部員みんなが、「ああ、剣道部で良かったなあ」と思えるような運営を、幹部としてやってもらいたいし、自分自身も納得のいくような稽古なり試合なりをやってほしいと思います。

これからは、先生方からも教わりながら、自分たちのもの、自己流のものを作って行って「中四国らしい剣道部」というものを作りたいと思います。

今日は、剣道はこうだとか、こうでなければならぬとか、ただか二七年しか剣道をやっていない私が、剣道について述べるのはおこがましいものがあります。しかし、私の体験を通しての気持ちの持ち方などをみなさんに、今後、剣道をする上で参考にしていただければ嬉しく思います。

一昨年、松山で全剣連のえらい先生が来られて、講習会がありました。講習会が終わって、講習会の鶴丸壽一先生（範士九段、七七歳）をJRの駅まで送って行ったんですが、そのときの車の中の話なんです。大阪の甲斐

利一先生との話で、「甲斐先生、俺はな剣道をはじめた七〇年や」と聞きました。その時はもうハンドルがグラッと傾きました。七〇年というのは私にとってすごい年月で、「自分でも二〇年以上もよく剣道をやったな」と思っていたところに七〇年という数字が出てきたのですからびっくりしました。鶴丸先生が「七〇年たったのに、俺の剣道ちゅうのはそんなもんや。あかんのう。」という話を甲斐先生にされてるのを聞きまして、なんてまあ奥の深いものを私はやってるんだらうと、逆に誇りに思ったりしました。

○松山大学(旧松山商大)OB  
**大城戸 功**

## 剣道との出会い

私が剣道を始めたのは小学校のおわり、中学校に入る前で、きっかけは友達に誘われたんですが、それまで陸上や水泳をやっていました。中学校に入ったらまあ、陸上部でも入りたいなと思ってました。走り高跳びで非公認ですけど、松山市の記録が練習中に出たりして、まあ陸上部にはいったらいいなあと思っていました。友達で剣道やってるのが二人いて、やらないかってことで、私が始めたのは寒稽古です。「〇〇君いこうや。」と言って、

朝迎えに行き、中学校三年間よくまあ稽古をしたものだと思えます。そのかいあって、まあ二連続スポーツ少年団の全国大会で優勝して、日本一になりました。本当は六コートあるので六つ優勝しているところがあるのだけれども、ともかく優勝したところがあるのだけ帰って新聞とかテレビとかにだしてもらって、その感触が非常にいいものです。強くなれば新聞にもテレビにも出れるっていう感覚でした。それから新田高校へ特待生として進学しました。

新田高校での練習は話では厳しいと聞いていたんですけども、ここまで厳しいとは思いませんでした。特に一年生は一番下ということで一年間苦しい思いをしました。離れて行った連中も数々いたんですけど、なぜやめなかったか、それは特待だったっていうプライドがあったからだという気がします。一年も辛抱すれば後輩が入って来ますから、一年間の辛抱ということとプライドだけで「やめたい、やめたい」とは毎日思っていたんですけど、何とか続けられました。やめちゃうと月謝払わないとあかんし、親孝行もできないから、まじめにして、やっと二年生になりました。これから少しは楽になるといふときに、これまでずうっと剣道部を指導されていた先生が病で倒れて亡くなりました。二年生のとき新しい先生がはいってきました。先生が変わると当然指導方針も変わって、前の先生のとときは一年生は非常に厳しくて三年生が非常に楽という感じだったんですけど、次の先生がきたとたん三年生が非常に厳しくなりました。二・一と一年生がお客様になったんです。そうなるとう度は一年生がお客様ですから二年生が雑用をすることになって、三年生になると今度は練習が一番厳しくなると、楽な時代が来るでなかつた満校でした。まあいい

メンバーがそろってましたので、インターハイを目指そうと真剣にやりました。この時期は自分でも一生懸命に剣道をやっていたと思います。

### インターハイ県予戦決勝のこと

稽古が終わって帰ってくるのは夜遅くなってきましたが、それからもういっぺん三キロくらいのお城山というところへ家から走って往復しました。高校二年の後半から一年間自分に課題を課して走りこみました。何が何でもインターハイに行つて優勝するんだという目標を決めていましたから、そんな苦痛には感じませんでした。そして二年の秋から私のチームは負け知らずで「絶対インターハイはとれる」そういう気持ちで試合に臨んできました。

三年生の夏の県予選。準決勝まではスムーズにきたわけです。で決勝戦の相手も新人戦で五〇でたたいにいる相手なので負けるはずがないと思っていた。私の中では。いつも負けている先鋒が勝つたりしたものですから、ちょっとリズムがくるつたのかもしれないけど、まあ先鋒が勝つた。次の次鋒はとられた。まあこれくらいはよしよしと思つていたら、常勝の中堅がころんじやった。そうすると、大将戦になる。まあ大将戦になるのはしょうがないと思つてました。そして副将が勝つて、大将戦にもつてきてもらったんです。まず、私が面を一本とりました。相手はずでに場外に二回出ていました。(※その当時は、場外反則三回で一本のルール)あとひと押ししたら場外反則三回で一本でしたから、まあちょっと押ししてもよかつたんですけれども、私の性格では真ん中に引張つて来ておいて打ちすえなあかん、反則なんかで勝てるかつという性格でした。それが不幸をまねきまし

て、一本勝ちでもよかつたんですけれども、二本勝ちせなあかん、なおかつ面でとらなあかん、と非常に欲張りな感覚をもっていました。そして、面をガンガンととりについたんです。ガンガンと追い込んでいったときに相手に苦しまぎれにバツと小手をうって小手を拾われたわけです。あーあかんと思つたわけですが、それですぐ延長戦に入りました。延長戦に入つて、それでもまだ負ける気がしません。絶対勝てると思つていました。

延長戦に入つてかなり時間が過ぎて、みんながつれてきたなというふうに通つてたようです。たまたまパンと引き面をうつたやつが、その時決める意志がなかつたんですが、パンと当たつたもんですから、決めにかかつたんですね。「メーン」といって審判にアピールしてたんですね。で「面」というてたところを「胴」で打たれて、その引き胴に審判の旗があがつて、インターハイを捨ててしまったんですね。

私はその時、あげた竹刀で「パン」と床をたたいてしまつたんですね。その試合後、今も新田高校の先生である私の師匠からは、床をたたいたことだけ、一言注意されました。負けたことは怒られませんでした。「そういうこともあるよ」つて言われたものですかから余計にカツとなって、涙がでそうになって、泣きたくなつたんですけども、後輩が先に泣いているものですから、泣けないんですね。

慰める側にまわらないといけなかつたのです。「いやいやお前のせいじゃない」と慰めててそのときにね、「お前やないよ俺が泣きたいんだよ。俺にはもうインターハイはないが、お前はもう一年あるやんか」つて頭の中で考えて、そういう気持ちだつたんです。それで家に帰りまして、一人で、親の前で泣くのはみつともないですから、お風呂の中に潜つて

「わんわんわん」涙がかれるまで泣きました。その思いがやっぱり今までずっとあります。苦しくなつた時にそれが必ず自分の中に出てきます。あの時のあの悔しさつてのが、今の私の剣道をやる原動力になっているんです。

### 大学に入つて

大学は、松山商科大学(現在の松山大学)に世話になることに決めました。そこで、最初、剣道部を見にいっただんですが、先輩に悪いと言えは悪いんですが、我々が新田高校で三年間築いたものに比べれば、なんて甘い剣道をやっているんだ、こういう大学生がいるんだらうかと思ひました。ですから、大学に入学しても、最初剣道部に入らなかつたんです。で、一週間くらいたつて、ある先輩から連絡がありまして、「大城戸、飯でも食わんか」と言つて焼き肉を食べにつれてもらつたんですが、その焼き肉がうまかつたのです。当時のことですから、今のバラとかロースとかはありませんが、よくても豚バラです。だいたい「かしわ」でした。非常にその「かしわ」がおいしくて、食いながら入部の誘ひにうなずいてしまいました。

幸い、一年の時から試合に使ってもらいました。入学した時の勢いがありまして、中四国で個人戦で優勝してしまいました。すぐ天狗になる性格なんですけれども、一年生で優勝したことでもういっちょ天狗になってしまいました。意気揚々と全日本選手権へ行つたのですが、全日本の試合ではまだ一〇年早いというふうな気持持たされ、帰ってきました。

ところで、剣道にもライバルがいたんですけれども、柔道部に一人いいのがいます。その浜田と仲良くなりました。現在、全日本の女子のコーチをしていて、柔ちゃんなんか

を教えている男なんです。私の剣道に対する考えと、こいつがもっている考えかたと非常に差があったんですね。一つのことに対する姿勢が違うって見ました。そいつを見てみるとだんだん自分が恥ずかしくなってきた。飲みにも行くし遊びにも行くんですが、きちっとけじめのつけられる男なんです。遊んで翌日つらいから休むとか、遊びに行くから今やっているトレーニングを中断して行くとか一つもしない。トレーニングをきちんとしてから遊びに行く。で、夜遅くまで遊んでも朝はきちんとやるというような、そういうけじめのしっかりしたやつでした。私とは違って、ちょっと自分に甘い、酔い潰れたら、次の日は体に悪いからやめとこうとかいうふうなことはありませんでした。彼がやっているトレーニングというのがまたこれがすさまじいもので、これにならってやらないとだめだろうと思いました。

また、全日本のレベルの違いを感じていましたし、やらんといかんということで二年、三年と全日本大会に出場すると試合の結果は出せないんですけど、だんだんと自分の力が全日本のレベルに近づいて来ているんじゃないかと……。四年になる前に、今まで関西に遠征に行っていたのを関東へ行こうと思いました。私には高校時代の後輩で関東の方ではばんばん活躍していた奴がいましたが、彼らとは夏休み新田高校で稽古していました。関東のレベルはだいたい感じていました。しかし、部員みんなを連れて行ってどんなものなのか、どのレベルにうちの大学がいるのか体験をやっておこうということで関東へ行っただけです。まず、国士館にお願いしたわけなんですけれども、「お前とことやったら、ウチの一線級は出さんかもわからんぞ」って言われまして、そんな失礼な大学には行くこ

とないわってことで、早稲田、法政、中央の三校と対戦して帰って来たわけです。で、その時はもうほとんど差はないんじゃないかと感じたわけです。練習内容も変わらない。逆に、商大はトレーニングをやっていましたから、練習量は多いんじゃないかなと感じていました。関東も関西もそうたいしてこわくないと、三年生の終わりに思ったわけです。四年生の時、全日本学生選手権大会で、中四国の代表として初めて優勝できたのですが、大会が終わって初めて、中四国の予選の方がきつかったなどの思いがあります。

### 同じ人間だからそんなに差はない

一年、二年でダメだったのは、後でよく考えてみますと、一年坊主で出ていって、四年生と試合すればそりゃレベルの違いを感じますよね。それがだんだんと自分が上になって行ったら同年代になるんですね。「同じ人間なんだから、そう差はない」ということです。大学卒業して、警察に入り、全日本のトップクラスの連中とは常にそういう考え方で対戦していました。警視庁にすごい先生方がいるんですけど、その先生と稽古するときに、ほとんどさわらしてもらえないんです。けれども最後に一本いいところが打てたんですね。またほかのすごい相手にも一、二本いいところが打てたんです。で、私にも一本か二本はいいところが打てる、そうするとどんなに強い人とあたっても、その一本か二本が試合の時に先であれば俺の方が勝つんじゃないかなと、そういう考え方を持つことができました。いまでもそうです。後で一〇本打たれようが、私の一本が先に打てれば試合には勝てるわけです。だから、気後れしないって事が大事なんじゃないかと、そんなふうに思っています。

### 世界大会のこと

二七歳ぐらいの時に試合に勝てない時期がありました。世界大会の候補選手に入れたのです。世界大会の二年前から、全国から三人選んで、一年間合宿して一〇人振り落とす、新たに一〇人加えて、一年間やって一〇人振り落とす。最後の一年間で三〇人から二人にしぼる。今振り返ると、この二人の中に残るための三年間っていうのが、私にとって非常にいい経験になったと思います。ものすごい重圧の中で、剣道をやるっていう経験はもうおそろく二度とないでしょう。本当に苦しい二年間でした。最終選考会の際に、

「おやじが亡くなったものですから、あなたがたになって、三勝九敗で試合を終わりました。それが、合宿の最終選考ですからこれはもうあかん、落とされたと思ったんです。しかし、本当の最後の最終選考は全日本選手権だと監督にいわれました。世界大会にできるためにはまず、全日本に出なあかん。出られなかつたら、それでも私はダメなのです。なんとか全日本に出て、準決勝まで残り、三位になりました。これでメンバーに入れてもらうことができました。」

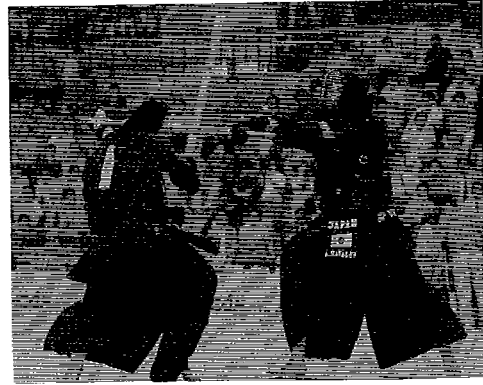
入れてもらったのはありがたいんですけども韓国(ソウル)入りしてから、チームリーダーの警視庁の遠藤先生からお話がありました。「大城戸、お前危ないよ」って言われただけです。過去の例からいえますと個人戦が七名、団体戦が五名全員出てる。「今回は、どうにも勝たなあかんから西川と岩堀をダブらせたいんや。その余り二名の中にお前がいる。」先生それは勘弁してくださいよ。松山で世界大会出てくるからって何百人も集まって壮行会やってもらって、饂飩までもらって、がんばって来ますって出て来たのに、試合を

せずに、手をたたいて来ましたって報告できますか。試合させて下さい」とお願いしたんです。しかし、ソウルに入る合宿の前から選手発表がない、ソウルに入ってもない。試合の二日前になってようやく発表があり、個人戦の四番目に名前があつて本当にほっとしました。勝負に勝とうとか負けるとかそうじゃなくて、とにかく試合に出られるというだけで満足していました。

団体戦の方は、力的にも日本のほうが随分上ですけども、本当に韓国が強くなっていましたから、試合になると方が一がある。あの雰囲気の中で、みんな日本をつぶしてしまえっていう観客しかいないわけですから、そういう中で試合をやった二人は、今でも心はひとつという感じなんです。

これから日本に対する感覚はだんだんと変わって来れると思うんですけども、まだまだ過去の過ちのことが根強く残って、日本人に対する感覚というのは、私たちの想像を絶するものでした。

個人戦になって、日本が一番期待していた西川選手が、一発目で韓国の選手に敗れました。それから、私と同じコートにいた熊本の亀井選手も韓国選手に負けまして、どないなるんやというふうな気がしました。三回戦で岩堀選手も韓国選手に潰されたし、日本勢がだんだんと韓国勢に潰されていきました。私の予定は、こちらから私が上がって、あっちから亀井さんが上がってきてベストエイトで当たる、たとえ亀井さんに負けても俺はベストエイトだということでした。そこへ亀井さんじゃなく韓国選手が上がってきたんですね。もう一つ前も韓国選手が上がってきたんですから、韓国人二人と自分が当たりました。そんなに難しい事はないんですけども、



第7回世界剣道選手権決勝で大城戸選手の初優勝が決まった瞬間  
(剣道時代 1988年8月号)

格の違いを見せようとしたら、ちょっとしん  
どいから、さあこいつって感じでやりました。  
日本人同士でやっているくらしいの試合をやっ  
ていけばそんなに難しい相手ではないんです。  
しかし、そこは世界大会ですから、日本の剣  
道を見せながら勝たないとだめだ。そのと  
ころがなかなか難しいところで、気持ちで勝  
負を落とすものが何人か出て来たわけです。  
準決勝へあがれば、あとは日本人二人でした。  
北海道の林選手がよく韓国のエースに勝って  
くれて、準決勝、決勝とも日本人になり、本  
当にリラックスして、たまたまいい結果にな  
って優勝できたんです。優勝したあとは、家  
族も来ているもんですから、記念撮影とかや  
りたいわけですね。しかし、前日の団体戦の  
時に、判定をめぐってかなりもめたんで、国  
民の感情を抑えるために国旗掲揚をしてもら  
えませんでした。で、記念撮影もなし、危険  
だということ、逃げるようにしてバスに乗  
り込んで家族の人も危ないということで、ホ  
テルで記念撮影をしました。非常にさみしい  
個人戦優勝であったんです。

### 考え方で変わるものがある

剣道は気持ちでかなり流れが変わって行く  
もので、力があっても半分しか出せなかった  
りということがあります。自分たちが鍛えた

技術を出すために、心の方も鍛えないといけ  
ないって言うのが難しく、奥の深いものなの  
ですね。私も中四国の大学のOBですから、  
中四国のレベルをあげたいっていうのは、大  
塚先生も山神先生もみんな同じじゃないかと  
思っているんです。いくら先生達がそういう  
ふうにいるんです。あなた達がやらないと意味  
がないんです。ここに来ていてる人達にリー  
ダ的な役割をしてもらって、やれるという  
プラス思考の考え方をしてもらいたいです。  
私は特別な人間じゃないんですし、どこにで  
もいる普通の歌って踊れるオジさんです。し  
かし、本当にちょっととした考え方や、人より  
ちょっと努力をしただけでも、すごく変わっ  
ていくものだと思えます。

例えば、あなた達の中の広島大の森川君が  
今年全日本の学生選手権で優勝したとします。  
森川はすごいなっていう感覚をもつかどうか  
ですよ。あいつがいけるんならオレもいけ  
るんじゃないかなって思ってもらいたいで  
すね。そうなるかと変わってきますね。「あ  
いつはもう昔からすごかった」そんなやつはそ  
ういふのですよ。だから、身近な奴が一步進  
めば進むほど、自分たちもそういうチャン  
スは必ずくるんだっていう意識をもつて下さい。  
勝つただけに剣道をやっているわけじゃな  
いんですけれども、どうせやるなら勝ちたい  
じゃないですか。大学の四年間なんているの  
は、一生懸命剣道ができる時期ですからね。  
余計なことを考えずに、当然遊びもせなあか  
んし、いろんなことを勉強せなあかん。でも  
剣道はできるわけです。要するに、あなた達  
のなかで、剣道がどういうポジションを占め  
ているのかですよ。

「俺にとって剣道って何だろう」、そこを  
もう一度考えてください。それは、個人個人  
によって剣道のとらえ方は違うと思えますけ

れども。

### 世界は心の時代になってくる

さつき倉知先生が剣道のイメージがよくな  
いとおっしゃってましたけれども、これから  
は絶対、剣道はよくなります。華やかなリー  
グを横目でちらつと見ながら、汗臭い面と  
小手をして、体と心を鍛えているあなた達を  
見ていて、将来は安心だなんて、外国人はそ  
ういう捉え方をしています。ただ、その数が  
減っているのが少し心配ですけども。文明  
ばかりを追っていった中で、今、アメリカや  
ヨーロッパ辺りの人間は行き着くところまで  
いってしまっただけですね。で、あとなんだっ  
ていうと今度はマインド・心になってきます。  
これからは、心の時代だって事をアメリカや  
ヨーロッパでは考えていると思います。で、  
そこで心をどういふふうには鍛えればいかに  
いかなって、日本にある武道がいかにいかに  
いかな。

今、みんなの中に、剣道っていうのがど  
こに位置するのかなんです。健康を維持し、体  
を鍛えるためだけのものですか。就職を優位  
にするためのものなのですか。本当に自分の  
一生を鍛えていくものなのですか。自分の人  
生をより良く生き抜くために、剣道修行する  
のだというポジションにすれば、大学を卒業  
して、社会人になっても、剣道を続けていく  
ことができるはずですよ。そこへこないとな  
時代の剣道で終わってしまいます。

### 剣道できる環境はそろっている

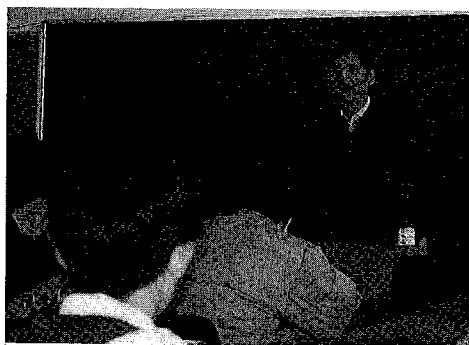
日本の剣道人口が減った減ったといいま  
すけれども、竹刀の音が聞こえない町って  
いうのはないんです。後輩や、企業に勤めて  
いる人が全国を転勤したり、県内を転勤したり

て感じたことなんてすけれども、「先輩、剣  
道っていうのはおもしろいですね。竹刀の音  
のしない町っていうのはないんですよ」と言  
っています。剣道できる環境はそろっている  
わけです。それをやるかやらないかっていう  
のは、これから、卒業していく人達の心がけ  
次第じゃないかと思えます。自分の中で剣道  
のポジションっていうのを決めて、そのポジ  
ションをいいたくるところにもっていくようにし  
てもらいたいと思うんです。やればやるほど、  
かめばかめほどわかってくるようなそういう  
剣道、— おいしい味のあるものをせっかく  
小さいころから始めたわけですから、大学  
だけを節目にしないでやっていってほしい  
です。そういう覚悟ができると、今後の練習に  
たいしても取り組み方がおそろく変わって  
くるんじゃないでしょうか。気持ちひとつで  
いろいろなることを良くすることができると、  
う考え方でも物事にあたってもらったら、非常  
にいい結果が出てくるんじゃないかなと思  
います。

なんか本当に取り留めのない話になって  
しまいました。しかし、こういう講習会をやる  
ということはいいこと、私達の時代にはな  
かったことです。私達の時代にこういうのが  
あれば、もっといい仲間作りとか組織作りが  
できていたんじゃないかなと、君たちは、いい  
時代に生まれてきたんじゃないかと思えます。  
何でもそうなんです、出てみないと有り  
難さがわからんとか、失くしてみないと有り  
難さがわからないものです。しかし、一番い  
いのは、もっている間に有り難さがわかった  
り、在学中に有り難さがわかったりするのが  
一番いいのです。とにかくいろいろな人に感  
謝しながら、大学でしなければならぬこと  
をそれぞれにきちんとやっていってもらいた  
いのです。

# 剣道の思想とロマンチズム

○高知大学教授  
大塚忠義



おおつか・ただよし  
7段教士・高知大学教授  
安房高等学校・東京教育大学卒業  
全日本学生団体優勝

か、人々は延々と剣道をやってきたわけだけれども、その中身はどのように変わってきたのか、終始、何を求めてきたのかというそのあたりを話してみたいと思います。

## 有効打突にはロマンが内在する

現在の有効打突の条文では、『有効打突は充実した氣勢、適法な姿勢をもって』という抽象的な前文と、『竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるもの』とした具体的な後文で構成されています。有効打突は、適法充実、正確確実な打突というような表現になっているのであるけれども、前文は基準のない抽象性を表しています。これは「できるだけ充実した、できるだけ適法な」ということを表していて、いいかえれば、「よりよい打突を目指していこう」という思想を表現しているのです。

大城戸先生と倉知先生が話してくださったのが、チャンピオンに向かって苦労や努力された技術や修練やトレーニングなどのリアリズムの話とすれば、僕がこれから話をするのは、ロマンチズムというか、夢というか、我々は何を求めて剣道をやっているのだろうか、友情だとか、勝利だとか、健康だとか、ダイエットだとか、人それぞれには目的があったり意義があったりするんだけど、そもそも剣道というのは、社会に生まれてどのように発展してきたのか、というあたり、つまり、剣道というのは、そもそも何なのかという断片を話してみたいと思います。

剣道が生まれた一七五〇年から、もうじき二〇〇〇年になる、その間の約二五〇年の話をしようと思います。今までの二五〇年間のうちの剣道の歴史、特に有効打突・一本というところについて、どのように変わってきたの

呂で泣いた」というような話は、極めて象徴的です。

名人技としての擦り上げ面のバパーンといふ、そういう技を練習すればするほど、気持ちのいい見事な一撃、打ち方をめざして自分の感性が豊かになっていく。そして地稽古のなかでも、よりよいものを打とうとする反復練習の中で我々はロマンチズムというものを育てさせていっています。このことをもつと世界にも、日本の人達にも伝えたいものです。私たちは、単に棒振りでもってこを創しているのではない、より良いものを創しているんです。そういうところに剣道の文化性とも、歴史性ともいえる知恵が込められているんです。『剣道の先達がやって来た知恵が「一本」に入っている。それをもつと確認しようじゃないか』というようなことが私の結論です。

## 三本と五分。時間性と得点性の混在

ところが現在では、それが発現しにくい状況になってきている事情があります。先程述べた適法、充実、美しい空、きれいな水、というようなロマンを、感受性のようなものを、美意識みたいなものを多く含んでいる、その有効打突を争う試合のルールは、三本を争う、いわゆる「先取二本」です。原則的には、三本で五分というようになっていきます。五分という時間制の中に、得点制が入っています。得点と時間制が両方ある勝負のさせかたといふのは、普通のスポーツでは見られません。

柔道が最もこれに近い五分とか、一分とかいう時間の中で一本を争っている。普通は、バレーボールなら、一五点の得点を争い、時間は何分でもかまいません。サッカーは四五分という時間を決めていて、その中で何点取ったか争います。だから、普通でいうと時間制か、得点制か、どちらかです。しかし、剣道の場合には、得点と時間がリンクして、五分の中で三本勝負をやるというようになっていきます。

## 全日本の八〇%が一本勝ち

今年の全日本選手権では、ベテランである西川さんが見事優勝を果たしました。全日本の戦後の試合をずっと調べたら、試合は、一本勝ちが八〇%前後あり、一本勝ちと延長戦が非常に多い。そのうえに、平均して試合時間は七分以上かかっています。極端に言えば七分かかって一本が出現しているわけですね。そもそも三本をやりとりをするならば、もっと短い時間の中ででてくるわけだけれども、今のように高度に洗練された選手達が争ったときには、一本を取れば、ほぼそれで時間がきてしまっただけ。もしくは、たいていの場合、延長戦に入り、その中で一本が決まっっていく。このように三本まるまるの勝負というのは学生の試合の中でも少なくなってきた。もう一つ例をあげれば、優勝した宮崎選手がこのような話をしました。ある雑誌で「勝負のためには、一本取れば時間を待つという戦術だつて有り得る。それを大先生たち



は積極性がないとか、攻撃的でないとかなどと言いますが、それは後で聞く話で、とにかく勝つためにはその時間を有効に、つまり、時間を戦術的にというか、一本取ったら時間がくるのを待つ。そのところは割り切っており「ます」というようにも座談会の中で話しています。そして、「その試合が終わったら、もう一度、自分の求める剣道をやります」というようなことを言っています。

二分や三分の延長戦が何度も繰り返されても結着がつかないことがあります。そんな時は、見ている者も試合を行なっている者も、これからは軽くても取って試合を終わらせる可能性がでてくるなど予想することでしょう。審判のほうも何度も何度も延長を繰り返していくうちに、まあ、この辺りで取るうかなどと思うことも不自然ではありません。そのなかでどういう技の応酬が繰り返られるかという技を取ろうと思っても、時間枠が長引いていくと、このへんで勝負を決めなければ、試合の全体のレベルもあるし、観客もいるしね。そのような感じで、早い話がこれからは軽くても取りますからというふうになっ

### 選手の心構えのせいはない

五分三本という時間枠の中で、勝負が熾烈になっていくと一本勝負化し、時間が長引いていきます。その中で、本来、適法とか充実したとか、より良い気持ちのいい打突と求めてきたにもかかわらず、勝負決着の方法としていうと、どうしても充実適法というよりも具体的に当たったか当たらないか、姿勢がどうの態度がどうの、見事な一本がどうの崩して相手の心理を予測してパーッといくというものを削らざるをえません。この時間枠と得点制の中で、勝負決着のために、軽く

でも取りますよ、当たれば取りますよ、という具合にして、そのような夢みたいなのが削られている。

そこが私は今日のルールがもっている、矛盾・問題だと思っています。これまではそういうことを試合者が勝利に走りすぎるとか、勝負心が旺盛すぎるとか、いたずらに技術の末に戻るとか、そういうようなことで、試合者の責任にしている考え方がありました。

「勝負心が強すぎる」「そうじゃない、剣道はもっと心を磨くものだ」「修行なんだ」ということで「見事な一撃を求めろ」そう言っている責任にしています。言わば、選手が勝利主義に走り過ぎるとい言いう方で、なんとかがパーし、まっとうな小手先の当てっこでない剣道を求めようとしています。しかしそれも、なぜそのようなになっていくかと考えたら、三本を争わせる得点制と、五分という時間制との矛盾があります。そこで、もともと求めるべきロマン、あるいは美意識旺盛な品位風格のうんぬんと言われるという自身が、当てっこにならざるを得ないというわけです。

こういう枠組みがそうしているんだから、試合者を責めても仕様がななんです。全日本の選手達、あるいは、チャンピオンになった方々が、試合の内容に関して酷評を受け、選手の責任にされていることがよくあります。そういうようなあり方は非常におかしいし、腹立たしいものだと思っています。

私はよく相撲をTVで見ますが、相撲をやめていった人達が、解説をしたり、審判をしたりしています。横綱や、その場所の優勝者に対しての評価をきくと、とても剣道では真似できない、非常に丁寧な若い力士を誉めています。「よく稽古した、よくこのように上手になった、強くなった」と。しかし、剣

道の場合は、勝ったにしても注文が多いし、酷評されます。大体、『剣道時代』『剣道日本』などの雑誌を読めばわかるように、勝った人に対して辛口なんです。辛口な評価、酷評、観戦記などを見ればそうなっています。

そのように、試合者の責任のようなものが多く言われますが、実際にはルールの矛盾から、一本勝負になりがちだし、時間が長引きます。熾烈な戦いであるから、技を出すのをひかえて、ここだということところで打って、それでも決まらなければだんだん時間が長引いていく……。

もう一つ例を挙げてみますと、今の全日本の決まり手は、面が四五%、胴がわずか三%、小手が五〇%と上がってきています。つまり、小技が多くなって、横軸空間を使う胴が少なくなつて、突きは皆無。

大城戸先生の話ではないけれども、どちらかという小手よりも、面でスパインと取りたいというのが我々の気持ちです。小手というのはどちらかという小さな空間でスパツというように、あるいは出小手で取っています。小手には小さな空間で俊敏に取っていくという美しさはあっても、ダイナミックな、言わば、空間の広さを感じさせるような外から見ても、なるほどといわせるものはやはり面です。しかし、今のところ、面の割合が五〇%から落ちて来ています。反対に、小手の割合が上がって来ていて、空間が小さくなつてきています。

### 「技」は自由な世界を拡げてゆく

普通のスポーツ技術は、上手になればなるほど、より大きな空間をつくり出します。例えば、背面跳びでいえば、より高く人間を運ぶ技を開発していきます。あるいは速く走るという走り方をトレーニングすることで、短

い秒数で一〇〇メートルを走るということ。水泳も同じです。技が上手になるということは、空間を広げることです。それが楽しいということは、手が伸びて所有するところが大きくなるということです。技は、自分の自由性を拡大して行く世界といえます。そのように、技術が果たす役割があるので。しかし、全日本の大会では、一本が出現しにくく時間が長くなり、決め技は小手が多くなって、空間が小さくなっています。こういうところで全日本はあまりおもしろくない。みんなはどうですか。全日本を楽しみに見えますか。私の学生からいうと、楽しみにしているほどではない。空間が小さくなっている、時間が長くなっているという中で、どうも剣道の試合というものは面白くないというようになっていきます。先程も言ったようにそれが選手の責任になっているけれども、こういう構造の中で生まれているんだということをお願いいたします。

### よりよい一本を保証できるルールを

それではどのようにしたらこの問題が解決できるでしょうか。まず、有効打突が得られる環境と早急の改革が必要です。私は、三本勝負を残して時間制を撤廃すると良いだろうと思っています。つまり、試合はどちらかが二本取るまで時間は無制限。要するに、パレールで、どちらが先に一五点とるか、時間制限がないと同じに、剣道の場合は二本先取、時間は無し。しかしそれでは、すぐ皆さんから反論が出てくるでしょう。時間がかかって仕様がよいのではないか。大会運営が困るのではないか。大会の終わる時間がわからないというふうになるから、それでは困るといふことになると思うんです。

試合空間は現在一m×一mの正方形で



やっていますが、それを三m×七mに縮小して、熾烈にそして逃げられない空間にします。稽古する空間というのは、今日みんなが練習しているみたいに、たいい細長い空間の中で稽古しています。そういう三m×七mの限定された空間だと逃げ場がないから、三本勝負時間制限なしでも、早く勝負がつくでしょう。さらに熾烈な戦いができるだろうと考えています。つまり対向軸が一m×一mだと、ぐるぐる回って相手をつかみにくいけれど、三m×七mでは対向軸が動きにくいのです。しかし、学生としては打突も残心も勢いがあるから、技も出しにくく、すぐ場外に出てしまうでしょう。そこで、今度はもうひとつ空間を設けます。あたかも柔道の赤畳のような線です。そのゾーンに出たらすぐ戻らなければならぬ。ゾーンまでは打ち込んで出てもいいけれども、その外には出てはいけない、というルールを作ってみてはどうでしょうか。

何でこんなことを考えるのかというと、全日本のように、日本のトップの大会が、一本勝負化して時間が長くなり、しかも、小手の打突が多くなっています。そして、剣道人たちがより良い打突を求めてきたにもかかわらず、こういう仕組みの中では、発現しにくくなって来ていますから、何とかその思想を維持したいし、発展させたい。剣道の世界をもっと広げたいということを考えているわけです。

特に、韓国の問題があります。日本は韓国に、日本の柔道がそうであったように、近い将来負ける日が来るのではないかと私は思っています。柔道は、オランダのヘーシンクという人に、日本の神永という人が負けたんです。それ以来、日本はルールを我がものとして改善したり、改革したり、できにくくなっ

ています。その結果、日本の柔道は一本を大事にしたいと思っているのですが、世界のルールでは効果というところまで細分化してしまいました。技あり・有効・効果というふうには、勝負決着のために一本を求めるというのではなくて、勝負決着の合理性を求めていった結果です。私は、そういう柔道の二の足を踏みたくはないと思います。

### 国際化の時代

「韓国に、団体戦では勝てるだろうけど、個人戦ではわからない」なぜそのようなことを言うのかと言いますと、韓国の高校選抜チームが来たときに、日本の三都県、東京、神奈川、山梨の連合軍がそれぞれ戦ったわけですが、結果としては日本チームが勝っています。しかし韓国の勝率は、勝ち三四％、負け四一％、引き分け二五％、と日本に接近しています。驚くべきことは、総得点三三三本中、韓国は一六八本、つまり四五％をとっています。四五％の本数を取りながら負けているというのには、二一で負けている割合が多いということですが、負けてはいるが、総得点の四五％を取っているということは、相当なものですよ。

『剣道時代』という雑誌に、松原という先生が、韓国を訪問した特集があります。韓国では剣道は陸軍や警察で採用されていると聞きます。しかも、韓国が日本に迫りつき追い越せという点で、極めて高い意欲で剣道を学んでいて、その上、スポーツに報奨金という制度があります。さらに、日本への留学もあり、東海大学、国士館というところに留学できるといふ可能性もあります。彼らが、国内で勝つて報奨金を手にリクルートシステムで日本へ来て、国士館でいわば生活をかけて練習をします。今後の生活を含めて自分の生活

の向上や安定というものがなかったときに、どれくらい努力するものかというのは、恐るべきことだと思います。その人たちが、世界選手権の中で、既に日本の選手達が、格の違いをみせようとしたときには危ないことになっています。私は、今の体制が維持されるならば、後五年一〇年の中で、韓国の選手が、個人戦で勝つ可能性が出てくるのではないかと思います。

### 日本文化としての剣道を確立して

日本の中では、立派に一本取っても、もう一本取りに行くんだといった美意識をもつこともできるし、心の中でその思想をもつこともできます。しかし、韓国の人達がそのような美意識をもつかどうか。このままのルールでいけば、先程も言ったように、日本の中でも得点の志が削られるようになっていきます。この状況がこのまま国際ルールとして使われるならば、一本に込められた日本剣道の思想は見えにくくなっていきます。それが世界のテレビで放映されたとき、それが『日本の剣道』ということができるだろうか、というのが、私の危惧するところですよ。だから、日本の剣道の形、剣士たちが打突にかけた願い、ロマンチズム、そういうものを世界の皆に知ってもらわなければならぬと思います。

それは、国内の問題を解決することでもあるのです。今までの国際化というのは、正しい剣道をまず教えて、「質を確保してから量へ」だったけれども、物事は「量を満たしてから質を求めろ」というのが私は自然であると思います。また、韓国の指導者がイタリアでも道場を経営しています。もちろん、イタリア人たちは、日本の指導者こそ本家本元というところで、尊敬の念を表してくれれます。「韓国の剣道はどうも」などと言ってくれる

けれども、彼らは道場を経営しているのだから、日本人だけが指導者ではないのです。

こういうことを含めると、背後にある思想をきちんと表現できるような時間制、本数制、空間などを考えていかなければなりません。注意深く考えないと、一本が見えなくなり、勝負がつけばいいのだというふうな柔道の二の舞に成りかねない。つまり、剣道の思想性や文化性というものが見えにくくなってしまいます。しかも、後五年内には実際に起こり得る、と予測される、日本が試合で負けたときに「実は、日本の剣道は一本を大切にしているので、この中には思想性があり、美学がありました」といっても、それは、負け犬の遠吠えとしか取ってもらえないでしょう。また、「段級審査では、段級審査の剣道」「試合では、試合の剣道」このように引き裂かれていながらもまた、このような構造の中にあるのでしよう。段級審査では、日本の高い思想性というものを見ているし、一方では、これを見ているにもかかわらず、こういう構造のため、試合中の評価と段級審査の評価が変わってしまいます。

私は、極端に言うと段級審査にあるような、そういう中身をもって勝負が堂々と繰り広げられるということを考え、統一するべきだと思います。今のルールそのものは、そう根拠のあることではなく、戦後の剣道が復活して来た過程で作られたシステムで、極めて便宜的なものの考え方で作られたものです。その当時、「剣道の思想性」なんてものをいうことができなかった、スポーツ化、スポーツ化という中で作製されたルールなので、もう一度そこを、見直してもらいたいと思います。それによって、剣道の技が花開いて行くことと確信しています。